

# 釜ヶ崎の 赤いげ先生

——本田良寛先生——

《8》

ドラマきっかけ

本田良寛先生は、釜ヶ崎の目撃労働者、医師をはじめ芸能人、作家、趣味の文芸クラブ、新聞記者らさまざまな分野の人たちと交流をもった。

釜ヶ崎に住み、現地の人間ドラマを描いた作品「人間百景―釜ヶ崎」を出版した写真家、井上青電(元大阪芸術大教授)は友人で、良寛先生の最愛の母がウイルス脳炎で亡くなり、研究のため大阪市立大医学部で病理解剖したあとの学術写真を撮ってもらうことを頼む仲だった。

西成警察署の防犯相談コーナー、松原忍が会長を務めた文芸クラブ「裸の会」のメンバーとは診察を終えた後に集まり、文芸談議に花を咲かせた。そして作家の藤本義一とは、藤本が良寛先生と「アパッチ集落」の人たちとの交友録をテレビドラマ「背と腹」として著したのがきっかけで交遊をもった。

## 多彩な分野の人とつながる



「良寛先生は、カマヤんの名付け親です」と話すありむらさん

「良寛先生は、カマヤんの名付け親です」と話すありむらさん  
ていました。そしてこれ持ちはあった。その表現は良寛先生からいたたい方法が漫画になった」とた書です。直筆で「青4こま漫画を描くこと」に。児落書 マロニエの花 「連載を始めて4〜5年ほどは漫画のタイトルがな映く恋の すききりし東郷青児の 酔いし落 かったので、センターだ書」(良寛)と認めた書を見せてくれた。

### カマヤン名付け親

「良寛先生は、カマヤ」と電話があった。良寛先生はその当時、私にとって雲の上の存在。僕の描く漫画をみていてくれたいるんや。もう即決で「カマヤン」に決めました」と笑顔で浮かべる。

### 老舗バーに通う

田さんが近づいて「バカ「BABY」は松鶴とよこ話すのは、釜ヶ崎をヤロー、おまえ、菓飲んく通った。同店の壁には舞台にした4こま漫画でいうことは、病気と「二科会のドン」と呼ば「カマヤン」を財団法人さんというお医者さんがいうことやないか」といれた美人画の巨匠、東郷西成労働福祉センターの青児が酔った勢いで階段 広報紙「センターだより」と笑顔を浮かべる。78年1月から約40年間 にわたって描き続けてい 釜の労働者にも受け入れられ、2017年1月に500号を突破。その間、カマヤン」は「リアリティーがあり、クズツと笑える」「元気がもたらえ」と評判になり、全国版のマンガ誌での連載や単行本化され、カマヤンの生き方に共感する

## 藤本義一や松鶴と交流

出身で立命館大を卒業後、自分の生き方に迷っていた。そして「釜ヶ崎」に出合った。

良寛先生の直筆の書



「このまちで人間の奥深さ、社会の深奥に身を置(こ)つ」と同センターに就職した。そして職員かお客さんも多くなった。編集委員会から「漫画をやらん」になつてもらいた描いてくれと頼まれた。い」と今も創作意欲は旺盛だ。(大山勝男)



良寛先生がよく通った老舗バー「BABY」